

# 岩波茂雄と下中弥三郎

——昭和三年前後の出版社の内的転換——

石 塚 純 一

岩波書店と平凡社は一九九三年、九四年にそれぞれ創業八〇周年を迎えた。両社とも浮き沈みのはげしい出版界にあつて書籍出版を中心に独自の世界を築いてきた。岩波書店と平凡社はよく似た面とまったく違った面をもっている。両社が経営の基盤を固め、個性を確立すると考えられる昭和三年前後までの過程を比較しながら考察してみたい。まずは創業者の岩波茂雄と下中弥三郎の創業以前の足跡と、出版について抱いていたイメージを追うことからはじめよう。

## 教員時代

岩波茂雄は一八八一年（明治一四）、信州諏訪の農家に生まれた。下中弥三郎は一八七八年（明治一一）に丹波

立杭の農業兼陶作の家に生まれた。両者とも早くに父を亡くし（茂雄一五歳、弥三郎三歳のとき）、母に苦勞して育てられた。岩波書店は大正二年（一九一三）、平凡社はその翌年の創業である。両者とも創業前に教員を経験している。

岩波は諏訪中学時代に父を亡くしたが、教育熱心だった母の支援を受けてのちに東京の日本中学に転校、第一高等学校を経て（二年落第して退学となるが）東京帝国大学哲学科専科に入学、卒業後、神田高等女学校に奉職し四年間教えた。下中は父を失うと家を借金のかたにとられ納屋に住まうなどたいへん貧しく、小学校を三年で終えると陶工として働いた。村の寺子屋教師を兼ねていた父親が遺した本を寸暇を惜しんで読んだという。独学で小学校・中学校師範学校国漢科の教員検定試験に合格し、兵庫県の各地で小学校教諭をしたあと、明治四四年（一九一一）埼玉師範学校の教諭として三年間勤める。両者とも非常に熱心な教師であったことは、辞めたのちまで教え子との関係が続いたことが証明している。

岩波が東京神田に古書店を開く動機を語ったなかに「当時理想に走っていた僕は学校の経営方針にあき足らず、私塾でもやらうとも思ったが、更につきつめて考へてみれば信仰もなき自分は人の子を賊ふ如きことより外出来な教育界より去ることにした」とある（安倍能成『岩波茂雄伝』一一三頁）。下中は後に（大正八）埼玉師範学校の卒業生である小学校教師を中心に教育団体啓明会を組織した。

なお、同時代の教師出身の出版人には講談社を設立した野間清治（一八七八―一九三八、群馬県桐生生まれ）がいる。

少年時代、岩波も下中も、村の伊勢講の代参として一人で伊勢まで旅をしているのも面白い。岩波は一六歳のとき、

諏訪から甲府までは徒歩で、富士川を舟で下って東海道岩淵へ出てそこから汽車で名古屋、伊勢へと向かった。その足で京都を見物し、佐久間象山の墓参りをし、さらに九州の鹿児島までおもむいている。尊敬する西郷南洲の墓参りが目的だったという。西郷を崇拜する点では下中も人後に落ちなかった（五回もその伝記を書いている）。下中も一七歳で村を代表して伊勢詣でに向かった。生まれてはじめての旅で帰路には常滑に立ち寄り、進んだ製陶技術や販売方法を学び、丹波立杭に戻って村人を集め日常雑器だけでなく雅陶を焼く改良策を研究し、販売組合を組織した。ふたりとも生涯を通じて旅を好み、旅行に限らずとも彼らの腰の軽い行動力をみると、身体こそメディアであるといわんばかりである。これも両者の共通点といえよう。

出版社を起こす以前に彼らは編集の仕事をやったのだろうか。岩波は大学卒業の頃から女学校に勤めるまでの短い期間、木山熊次郎（岩波が信頼していた一高・東大の先輩。読売新聞記者兼雑誌経営者）の「内外教育評論」の編集を手伝ったことがあるが、本格的に手がけたかどうかはわからない。下中は兵庫県の各地で小学校の国語教師を勤めながら、「小学校に於ける国語及び其教授法」という本を自費出版したあと、明治三五年に上京し、小栗栖香平の協力者として「児童新聞」の創刊に尽力、紙面のほとんどを一人で書き、原稿の割付から校正まで手がけた。翌年から「児童教育」と題名を改め半月刊の雑誌とした。その後「婦女新聞」に入社し（一九〇五、明治三八年）編集ならびに執筆に活躍、翌年雑誌「ヒラメキ」を発行。学校教師を続けながら精力的に漢籍の和訳など編集・執筆活動をおこなっているが、当時は出版そのものへの興味ではなく教育改革への思いを主張するために雑誌編集に携わっていたと思われる。

## 古書店から出版へ——岩波書店の開業

岩波は大正二年（一九一三）七月二九日、四年間つとめた神田高等女学校を辞したその日に車を引いて古書市におもむき書物を仕入れ、八月五日、神保町の交差点近く（現在、信山社のある場所）に店を借りて商売をはじめた。古本屋からスタートしたのである。商売をしようと思いついた動機をつぎのように語っている。

さて教職を去ってから以前より憧れておった晴耕雨読の生活を富士山の麓で送ろうと場所まで心に思い定めたのであった。しかし当時未だ三十そこそこの若さだったので、田園生活は暫く取って置きものにして、その前に一度市民の生活をしてみようと思いついた。（中略）人のため必要な品物なるべく廉価に供給すれば人々の必要を充たし、また自分の生活も成り立つ、とすれば商売必ずしも卑賤ならず、官吏や教員と異なつて自由独立の境地も得られ、（安倍前掲書一一五頁）

と述べ、つづけて「何の商売でもよかった」、「市民の生活をしてみよう」などといっているところからすると、高等遊民的な意識だったのだろう。

一方、下中は大正九年のことだが、第一回メーデーで代表演説に立ち、金さえあればどんなぼんくらでも大学へ行くことができるような教育制度の不平等を指摘し、教育の機会均等を叫んだ。この日のメーデー歌は下中の作詞という。

この世の富も繁栄も  
われ等が汗の末になる

われ等が手をばおく時は

世界も闇となりぬべし

汗の値の貴さを

いざ遊民に示さばや

遊民に労働者の汗を示そうというあたり、独学者と大学出という二人の青春時代の違いを表わしている。ちなみにこのメーデー歌は一高寮歌「ああ玉杯に花うけて」の曲に合わせて歌われ、第三回のメーデーから「聞け万国の労働者」（大場勇作詞）に代わった。

岩波が出版を始めたのは古本屋を開いた翌年、大正三年で処女出版物が夏目漱石の『こゝろ』<sup>\*1</sup>だったことは有名である。同じ年に下中は自分で書いた辞典『ポケット顧問』や、此れは便利だ<sup>\*2</sup>を刊行して平凡社を創立した。岩波書店は大正八ころまで古書の商いをつづけ次第に出版へと傾斜していった。大正六年の『漱石全集』全一四巻の刊行までを創業初期とすると、この間の出版点数は五一点、中でも漱石の『こゝろ』以後の作品『道草』『硝子戸の中』『明暗』、倉田百三の処女作『出家とその弟子』、西田幾多郎『自覚に於ける直観と反省』、鳩山秀夫の『日本債権法総論』、『哲学叢書』全一二巻などがよく売れ、経営の基礎となった。鳩山秀夫は岩波の一高時代の友人でこの成功によって岩波は法律関係書群の系列をつくり、師の西田幾多郎は岩波によく協力した。しかしなんといってもその後の出版の傾向をはっきりと示したのは『哲学叢書』だった。岩波の一高・東大哲学科の友人阿部次郎、上野直昭、安倍能成や、先輩にあたる紀平正美、速水滉、そして教授陣の西田幾多郎、朝永三十郎、桑木巖翼を動員して編集執筆がおこなわれた。彼らはこの時、西田の四五歳を筆頭として最年少の安倍が三二才と、みな若かつ



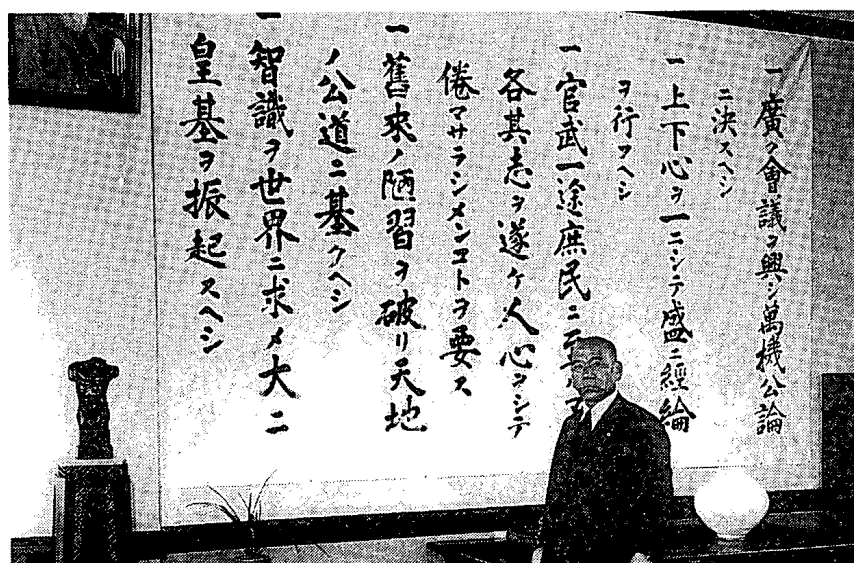
大正7年の岩波書店店頭。夏目漱石『明暗』発売の日に店員が勢揃いする。右から四人目が岩波茂雄。『写真で見る岩波書店80年』より。

たのである。岩波書店はこの叢書の成功で哲学書肆としての名を知らしめるとともに、これらの友人や師の人脈で筆者を広げ、彼らに支えられて発展していく。

安倍能成は『岩波茂雄伝』で「岩波に古本屋をやるはじめてから出版をやる積もりがあつたかどうかは、判定しにくい。恐らく古本屋をやって居る中にさういふ氣になったのであらふ」（同書一三七頁）と述べている。また別の

箇所では「岩波が真理、真実を認識することを第一義としたこと、また岩波自身が主義信条の所有者でなくて、広くあらゆる教義、思想、主義にも真理を認めその存在理由を許すといふ所から、その良心に従ってやったことであるが、又岩波がかつて『本を読んでいる本は出せないよ』といった如く、彼が学者でなく勘に従って大体を大ざっぱにつかんだのに基づくであろう」（同書三〇〇頁）と記しているのは友人としての岩波を的確に評した言葉である。

大正時代頃までの書籍出版社は、今とは違って編集者を何人か雇って企画を出し合うという風ではなかった。岩波書店の少年店員だった小林勇（大正九年入店、のちに会長）は、大正一四年ころになってはじめて編集の仕事をする社員が一人できたと書いている（『惜櫟莊主人』「小林勇文集」第三卷所収、六五頁）。岩波一人が自転車に乗って著者の間を走りまわり、精力的に仕事をしていたわけで、出版社の性格は岩波茂雄によって形作られていたのである。このことは他社でも同様で、編集者がいたとしても職人的な徒弟制度だった。有斐閣（明治一〇年古書店として創業）でも大学出の採用は第二次大戦後のことで、それまでは古本屋の社主でもあった江草斧太郎が有望な学者を学生時代から目をつけて世話をし、卒業すると何か書いてもらい学校に売り込むという方式を続けた。持ち込まれた著作をほとんど無条件に出版したが、無条件だったのは東京帝大法学部出身者で、のちに経済学部や京都帝大まで広がったという（『有斐閣百年史』）。文学出版で名高かった第一書房でも昭和四・五年のこととして福田清人は「改まった新しい出版企画の編集会議などなかった。ほとんどが長谷川さん（社長）の好みというか判断によって出版されていた。それで第一書房は個性ある出版もできたのである」（「長谷川さんと第一書房の思い出」『第一書房長谷川巳之吉』所収、八七頁）といている。



店主室の岩波茂雄。部屋には五カ条の誓文を掲げていた。  
昭和14年。『写真で見る岩波書店80年』より。

岩波茂雄が大正八、九年ころ入店する店員の紹介者に寄せた店員の理想的標準には、「一、あくまでも真面目なる者、良心の敏感なるもの 二、健康の者、儀容ある者 三、頭腦よき者、理解力の勝れた者 四、奮闘的の者、負けず嫌いの者とあつた」（安倍前掲書一五五頁）という。

### 日露戦争に対するふたりの態度

明治三七―三八年の日露戦争の時、岩波は一高を二年落第して高等学校生活を終えるが、安倍能成が「日露戦役の時、私なども同じく戦争などは顧みず、自分の煩悶に没頭し、トルストイに感激し、聖書に救いを求めて得ず」と記すように、華嚴の滝に身を投げた藤村操（岩波の後輩）へのシンパシーや失恋から生まれた形而上的悩みを抱えて、社会的関心は薄かったようである。対する下中は、二六歳、日露戦争の最中

に反戦詩を書き「平民新聞」に発表した。「悪魔万歳」という作品だ。尾崎秀樹はこの下中の変貌について「それまで下中弥三郎の比較的穏健な漸進主義的な態度に比べるとこの痛烈な批判は目をみはるものがある。彼の内部にくすぶりつづけていた感情が一度に噴出した感じである」と述べ、「婦女新聞」の同僚だった島中雄三（一八八一

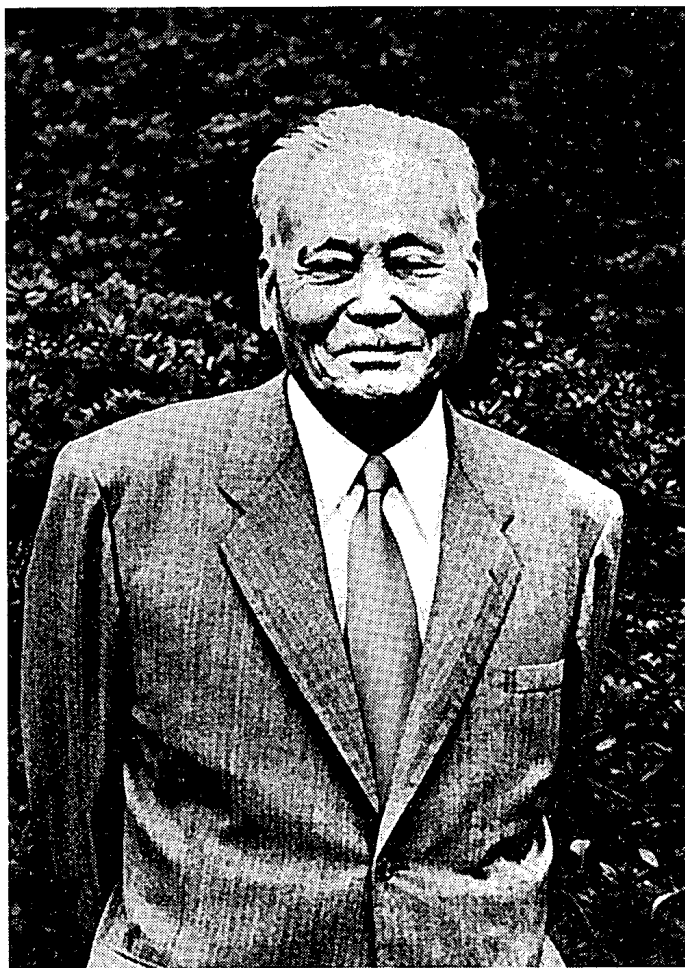


一九四〇、社会運動家で下中の生涯の友人。中央公論社社長嶋中雄作は弟）との交渉を通して社会的自覚をつよめたのではないかと推測している（尾崎秀樹「下中弥三郎と平凡社の歩み」『平凡社六十年史』三八―三九頁）。岩波はこの時期、社会的関心が薄かったが、出版社をはじめて以後は社会問題にも関心をはらい、美濃部達吉天皇機関説事件への対応、日中戦争に反対する姿勢など社会的公正に対して敏感であったことはたしかで、また政治好き（昭和二〇年、貴族院議員の東京都補欠選挙に立候補し当選）でもあった。

### 教育運動としての出版——下中弥三郎

岩波茂雄が出版社を始める動機は必ずしも明確ではなかった。しかし、古書店からスタートした一年後、出版を開始すると次々に成功し飛ぶ鳥を落とす勢いで信用を得、大正六年『漱石全集』の刊行によって有名出版社のひとつへのし上がっていった。これに対して、下中弥三郎は創業前からすでに著述家となり、雑誌を発行するなど出版の経験は豊富だった。しかし、自著の現代用語辞典『ポケット顧問』や、此れは便利だ』を刊行して（この本は実際よく売れた）平凡社を設立したものの、その後の彼の行動をみる限りあまり本気で出版経営に取り組んだとは思えない。本格的に出版に乗り出すのは大震災後の大正一二年ころからである。それまでの下中は教育運動、社会運動に邁進していた。生涯を通じて彼の活動と思想の振幅の大きさをみると、いったい下中という人物は何者だったのだろうかと思わせる。下中の人脈は、先に見たような岩波の友人・教師たちからなるアカデミズムにつらなる人脈とはまったく異なっている。

下中が平民新聞に詩を発表し、社会主義に近づいたことは先述したが、その後、「文芸、宗教、道德の研究を目



晩年の下中弥三郎

共同生活をしていた）らと交わっている。明治四二年、勝部みどりと結婚、生活のために内外出版協会から「通俗菜根譚」「呻吟語」などの漢籍の和訳をおこなった。明末の洪自誠の書いた「通俗菜根譚」は江戸時代から明治まで読書人の間でよく読まれたらしい。その序文に彼は「この良著も、徒に一部人士の間のみの占有物たるが如き観あるを遺憾に思ひ、自ら揣らず敢えて和訳を試みたるなり。和訳するに当たりて、著者は従来行はれ来りたる漢文解釈とは聊か異なる方針を取り、かの講義体説明体を全然避けて、一意原著の意味を直接我が現代語をもって味は

的とす」る雑誌『ヒラメキ』を創刊し（明治三九年）、その第二号で「吾人は社会主義を以って、精神的革命の導火たらしめん、これによって、最後の理想を実現し得べしとは思はざるなり」といつているように、社会主義が人間救済の最終目的とはならないという立場を表明している。明治三八年ころから国漢教師として勤めていた日本女子美術学校を明治四〇年に退いたのち、しばらく大久保に独居し、そのとき中里介山（『平民新聞』に投書し、「火鞭」グループに加わり、神道、仏教、キリスト教を信奉する三人の仲間と大久保で

しめんことを期したり」と書く。「貧しいといふ事は必ずしも羞づるに足らない。羞づべき、貧しいといふ其の事よりも寧ろ向上の志に乏しい事であって、向上の志さへ有るならば、現在仮令いかに貧しくとも決して羞しく思ふことはない」という「呻吟語」の文句はそのまま彼の処世訓ともなったと尾崎秀樹はいう（尾崎前掲書四五頁）。岩波の教養が聖書やトルストイといった西洋思想にあったとすれば下中の教養は国漢文学の中にあった。

明治四四年、下中は埼玉師範学校に就職、舎監もつとめ一風変わった教師として生徒たちの信望を集めた。歴史あるこの学校には和漢の参考書が夥しく用意され、『資治通鑑』『史籍集覧』『群書類従』『ウェブスター英辞書』など、「興味過多症に罹っていた私はこの学校に勤むることによって恵まれた」、「『価値の哲学』『社会の経済的基礎』『今日の化学』などといふような書物は独学者の私の知見をどんなに広めてくれたことか。（中略）三省堂の『日本百科大辞典』を時折開いて、辞書の有難さをしみじみ味わったが、さて、辞書は用ひ慣れると欠点が目につき、次第によりき辞書への欲求が起こる。私の百科事典編纂への意志は確かにこの時代に潜在固定した」（「思い出を語る」『出版人の遺文』所収、二五頁）とのちの百科事典出版の志と教師時代とを重ねて回想している。

### 啓明会と児童の村小学校のこと

大正八年、下中は埼玉県下の青年教師を集め教育運動団体「啓明会」を結成、新潟無明会、兵庫県の蒼空会などの教育団体と結合し、翌年の第一回メーデーには教員組合啓明会として参加、これは日本で初めての教職員組合であった。教育理念の民衆化、教育の機会均等、教育の自治の実現、教育の動的組織を掲げ、教育を受ける権利つまり「学習権」を主張し、機関紙「啓明」（のちに「文化運動」）を発行した。この運動および下中の教育と労働に

ついでに主張は普遍的価値を含む注目すべきものだが（下中弥三郎『万人労働の教育』一九二三、内外教育出版社）、彼が戦時中に大政翼賛会へ関わった烙印からか、戦後の教育運動の中では近年まで無視され続けた。下中は啓明会を押し出して全国的な労働組合同盟会の結成を促したが、官憲の圧迫が強まり、労働運動内部のアナーキズムとボルシェビズムの思想的対立が顕在化するなかで、労働組合総連合の結成（大正十一年九月）には産婆役をつとめただけで、会自体は参加しなかった。機関紙「文化運動」は島中雄三が書いた「国家生活の合理化」が発禁処分を受け、第三種郵便物認可の取り消しを機に廃刊となった。同時期に出版された啓明パンフレットなどに下中は戯曲「かくて村は甦る」（マハトマ・ガンジーにちなんで的間雁二の筆名で執筆）や『万人労働の哲学』など数冊の本を書いた。「この世に生を享けた人間は誰でも、この世の中の文化的饗宴の宴席の一つに列なる当然の権利がある」（『万人労働の哲学』）と書いている。

労働運動自体からは離れるが、大正一二年に平凡社を株式会社として出版活動を再開した後も、下中はさまざまに社外活動が続いている。その一つが児童の村小学校の開設だった。野口援太郎（姫路師範校長だったが、既成の師範型教育を批判）、為藤五郎（元博文館の「太陽」編集長）、志垣寛（教育者・作家、平凡社社員）とはかつて東京池袋に校舎を建て児童六〇人で始めた学校は一クラス二〇名に一人の教師と数人の助手が指導に当たり、教室、カリキュラム、時間割などの枠にとらわれず児童の自主性のみを重視する教育で、無賞罰、無試験制であったという。昭和十一年まで一二年間に九四人の卒業生を送り出した。現代では不可能かもしれないような思い切った実験的な試みを実行してしまうところが面白い。

下中は教育によって社会を変革しようと真剣に考えていた。それは時に政治運動として展開し、時には実践とし

て学校を運営する、その流れのなかに出版もあったといえよう。大久保にあった当時の下中家には平凡社、啓明会、労働組合同盟会本部の三つの看板が掲げられていたという。

## 大正時代の出版活動

大正三年から一五年まで、岩波書店の出版点数は五四二点、平凡社はわずかに八八点である。大正一五年時点の社員数は、岩波は四一人だったが、平凡社はよく分からない。大正一二年に株式会社化した時点で社員四名だったことがわかり、その後五名増えたことは確かだが（『平凡社六十年史』）、せいぜい一五名程度だったと思われる。戦前の平凡社には下中の運動関係の人物がしょっちゅう出入りしており、誰が社員で、誰がそうでないかわからなかったという。出版経営にかける意気込みは明らかに岩波が勝っていた。

岩波書店の刊行物年表をみると大正一〇年に雑誌『思想』と「科学叢書」が刊行されるまでは、およそ、「哲学叢書」の人脈による哲学関係書、漱石と島木赤彦関係の本、小泉信三関係の社会問題関連書、橋口五葉の浮世絵シリーズ、倉田百三の本、鳩山秀夫関係の法律学の本で占められている。成功した企画の後を追っていく出版社のありようを示している。

平凡社は大正一三年までは実に二一点しか刊行していない。本気で出版に取り組んでいなかったことが明らかだ。『や、此れは便利だ』だけがよく売れて大正九年に改訂増補六〇版を出し、一三年に『新式漢和辞典』（黒竜会系の国士で辛亥革命に協力し、宋教仁暗殺後漢字研究に没頭したという清藤幸七郎の編纂）と『神祇辞典』を刊行したのが注目されるだけといってよい。ただ、辞典類の印刷を行うために中野に文化印刷所を設立し、新しい活字の

鑄造を試みさせている。その中心人物は労働運動で知り合った野村孝太郎と水沼辰夫で、彼らはアナーキストだった。一四年になると平凡社の別会社、万世閣（下中夫人名義。清藤が発行責任者）と文園社が作られ、文園社からは『鑑賞文選』という小学生のための学年別綴り方雑誌を創刊。これは小学館の学年別雑誌の創刊と同時期であり、綴り方教育の上で重要な位置を占める。万世閣からは高群逸枝『東京は熱病にかかっている』、大正一五年には高群の『恋愛創世』、渋谷定輔『野良に叫ぶ』などが出版された。同年、平凡社からは『尾崎行雄全集』全一〇巻、『大西郷全集』全三巻などユニークな企画が出現する。

高群逸枝の本が平凡社関連から出されているのは、下中の教育運動の同志で平凡社社員となった志垣寛の紹介で橋本憲三が大正一二年の新発足時に入社した縁である。橋本の妻が高群で、志垣夫人と熊本女子師範時代以来の友人だった。渋谷定輔『野良に叫ぶ』は農民詩集としてすぐれ、大西伍一『土の教育』（大正一五）とともに下中が労働運動の後に構想した農民自治とその運動の過程で生まれた企画である。石川三四郎らアナーキストたちと啓明会有志とで組織した農民自治会や日本村治派同盟の話も興味深いが、こういう人物たちが下中の周辺にいたということを記憶して先に進みたい。

大正一四年、岩波書店でも農民運動の高まりに見合った企画が出版される。那須皓の『公正なる小作料』だが著者は東大教授だった。

### 昭和二年前後——岩波書店の場合

昭和二―四年（一九二七―二九）といえば、円本の時代として出版界では有名である。金融恐慌のさなか、世界

恐慌目前の不況の時期に、改造社が経営危機を乗り越えるために社運を賭けて放った『現代日本文学全集』の成功で、狂ったように全集本が売れ始めほとんどの出版社が競って一冊一円のシリーズを刊行し、大もうけをしたと思いきや、あつという間にブームが終わり返品が残ったという現象である。平凡社と岩波書店の動きもこのブームに関係するが、円本現象にとらわれすぎて従来見過ごされてきた面があるように思う。両社を軸に転機を示す出来事を追ってみたい。円本ブームについてはかずかずの証言と若干の分析が行われておりそれに譲ることにする。<sup>\*4</sup>

平凡社の出版点数が飛躍的に増え特徴的な出版物を刊行し始めるのは、昭和三年ころからである。岩波書店も先述のように、大正一〇年に『思想』（和辻哲郎と岩波茂雄が編集）『科学叢書』（漱石全集以来岩波が接近した寺田寅彦と石原純が中心）を刊行開始して出版の幅を広げつつあったが、まだ『哲学書と漱石の出版社』の範疇を越えてはいなかった。しかし昭和二年に岩波文庫を創刊し、『芥川竜之介全集』全八巻<sup>\*5</sup>を刊行開始、翌三年、岩波講座『世界思潮』全一二巻、『漱石全集』普及版二〇巻（実は円本。それまで一冊四円五〇銭だった同全集が一冊一円となった）をスタートさせた。これらはすべて好業績をあげたわけではなかったが、時代感覚をとらえその後の出版活動につながる企画だった。昭和三年前後は両社にとって画期であった。

「岩波文庫」は円本の成功を横目に見ながら、それに批判的だった岩波が三木清と計ってドイツのレクラム文庫に倣って創刊した。星一つ二〇銭の超廉価版は経済的危惧や著者印税の減殺等の問題が指摘され、社内や著者筋から反対があったという。それを押して刊行に踏み切ったのは、岩波のアドバイザーがそれまでの学者たちから、三木清へとシフトしたことによるものでもあった。三木はこの年京都大学を辞し法政大学教授となって上京、岩波書店へ定期的に通って編集に協力した。安倍能成は、

岩波は終生三木を愛好したとはいへないが、三木の学才は認め、彼の言に聞き、又結果から見ても随分彼を利用したとは言へよう。この頃創立当時の助言者、相談者だった阿部次郎、漱石全集以来岩波と親しくなった小宮（豊隆）は、仙台の東北帝国大学へ、安倍（能成）は京城帝国大学へ、次の時代の和辻（哲郎）は、京都帝国大学へ赴任して、（中略）三木は意気投合した小林（勇）と共に、岩波を動かす力を持つ点において、二者（東京に残っていた茅野儀太郎と高橋穰）にまさっていた。これは岩波の新時代に対して積極的に働きかけようとする性向によるところも大であつたろう（安倍前掲書一六七頁）。

と述べているように、三木の参加と、大正九年に入社した小林勇がこの頃から編集に参加し、社の体制が変化しつつあったことを表わしている。有名な「岩波文庫」の発刊の辞は三木清が草稿を作り岩波が手を入れた。小林勇は、岩波がはじめから自分で書けば「真理は万人によって求められることを自ら欲し」等とはいわなかっただろうと述懐している（小林勇『惜櫟荘主人』八〇頁）。

三木清が推進したもうひとつの企画は岩波講座『世界思潮』（編集は三木、林達夫、羽仁五郎）である。岩波講座はその後、第二次『物理学及び化学』二四卷（寺田寅彦、柴田雄次、石原純編）、第三次『生物学』一八卷（柴田桂太、谷津直秀、小泉丹編）、第四次『地質学及び古生物学・鉱物学及び岩石学・地理学』三三卷、第五次『日本文学』二〇卷、第六次『教育学』二〇卷、第七次『哲学』一八卷と続き、岩波書店の代表的シリーズ企画として現在も柱の一つとなっている。安倍が「岩波の期するところは、編集者と執筆者とに学界一流の大家及び少壮学者を網羅し、又最新の学説に遅れざらんことを期し」と書いているように、岩波書店がアカデミズムと出版の結びつきを一つの戦略とした明快な企画のスタートだった。



岩波書店の内部ではこのころ新展開にむけて動いていた。その一つが大正一四年の複式簿記の導入という会計制度の変革と、第一銀行頭取明石照男（岩波の友人）の紹介で同行の曾志崎誠二が財政顧問のような形でコミットしはじめたことである。また、昭和三年にはじめて店内にストライキが起こり、店務の多忙と店員の疲労不満が当時の労働組合運動の高まりに刺激されて、増給や労働条件の改善要求となってあらわれた。争議自体は要求をある程度のもので（丁稚制度の廃止や勤務時間の取り決め、給与制度の改正などを文書で提示）、一〇日間ほどで解決を見た。このときの岩波茂雄の態度を安倍は「さて主人公岩波の態度はといふと、実に優柔不断で無用に争議団に同情したり、自分は以前から店員の待遇改善を考へて居て、堤（堤常、支配人のちに会長）にそれをいったのに堤が反対したのだ、といふようなことを、のちまでくどくどとぐちったりし」たといっている（安倍前掲書一〇〇頁）。

岩波自身がどれほど意識的であつたかは別として、この昭和初期に岩波書店は経理制度と労働組織の改革、編集体制の整備をおこない新しい段階へと進んでいったと考えたい。

## 昭和三年の平凡社

日本のマスメディアは関東大震災（大正一二年）の二、三年後に成立したといわれている。大毎（大阪毎日新聞）・東日（東京日日新聞）が百万部を突破し、大量読者のために新聞の娯楽性が進み、印刷技術の革新がはかられ、「キング」（大正一四）など新しい雑誌が誕生した。

平凡社は大正一二年に株式会社となり（岩波書店の株式会社化は戦後昭和二四年のこと）出版活動が活発化するといったが、大正期までは先に挙げたような書目が刊行されたに止まりまだ本格的とはいいがたかった。ところが

昭和二年になると一変して出版に打ち込んだ様子がわかる。主な全集企画を列挙すると、

昭和二年

現代大衆文学全集 全六〇巻（完結昭和六年）

世界美術全集 全三六巻（完結同五年）

昭和三年

新興文学全集 全二四巻（完結同六年）

社会思想全集 全四〇巻（完結同八年）

雑誌「平凡」創刊（同四年廃刊）

昭和四年には、「菊池寛全集」全一二巻（完結五年）、「伊藤痴遊全集」全一八巻（完結五年）、「怪奇探偵ルパン全集」全一四巻（完結五年）、「世界探偵小説全集」全二〇巻（完結六年）「新進傑作小説全集」全一五巻、「明治大正実話全集」全一二巻、「映画スター全集」全一〇巻、「少年冒険小説全集」全一五巻などを出す。

下中弥三郎は書いている。「昭和二年、駿河台にうつつた平凡社は、円本の流れに掉さして『現代大衆文学全集』全六〇巻、千ページ一円を標榜して予約出版をはじめ、会員に十五万人を獲得、円本当たりの三社の中の一つに数えられ、つづいて昭和三年（二年の誤り）『世界美術全集』全三六巻を発表して一二万の予約を確保した」（「思い出を語る」）。

突然堰を切ったように全集ものが刊行されたのは、改造社の円本成功に刺激されたことは間違いないが、それまでの下中の行動からすると出版に本腰を入れた理由がもう一つよくわからない。『現代大衆文学全集』の企画に実

際あつたのは橋本憲三だった。彼は学術出版を社の基本に据えるべきだと考えていたが、その実現のために資金的基礎を固める目的でこの全集を進めたという。しかし下中は学術出版中心主義には懐疑的で、「つねに反アカデミーの立場を保持し、むしろ高度な学術的教養に浴すことのできない一般大衆のために門戸を開放すべきだ」という意識にもとづいて、「や、此れは便利だ」を出版してしまい、一貫して学問教養の大衆化につとめてきた」と尾崎

平凡社の円本『現代大衆文学全集』の新聞広告。昭和2年3月29日付、東京朝日新聞の2ページ全面広告の右頁。

は書いている（尾崎前掲書八三頁）。このあたりも、岩波茂雄との違いを表わして興味深いものがある。

それまで平凡社は文壇作家とはほとんど交渉が無かった。しかし白井喬二を中心に大衆作家たちが集まる「二十一日会」（本山荻舟、長谷川伸、江戸川乱歩、直木三十五らがあり、彼らは当時三〇〜四〇歳代の気鋭の書き手だった）を口説いて全面的に協力させ大成功に導いたのだった。

つづく『世界美術全集』も当時としては画期的な企画だった。美術書などはせいぜい千部程度の売り上げしか見込めなかった時代に円本によって刊行しようと考えた。正木直彦（東京美術学校長）や田辺孝次（同教授）、木村莊八（画家）などが編集に参加、田辺の発案で世界の美術を国別・地域別に巻割するのではなく、時代別に各国を横に切る構成を採用した。現在の美術全集はすべて国別であり、平凡社版も戦後の改訂版では地域別に改められたが、今みると時代で輪切りにするこの編集は実に新鮮で面白い視角を与えてくれる。

昭和三年の『新興文学全集』と『社会思想全集』は、金融恐慌の余波がのこる不況のさなか、労働運動の高まりと政治闘争に対する弾圧が激しくなる時期に刊行が開始された。前者は時代に敏感に反応し、当初プロレタリア文学の初の全集として構想された。しかしユニークだったのは「新興文学」と謳ってもっと幅を広げようという下中のアイデアだった。当時編集者だった松本正雄は「私はやはりプロレタリアという言葉を表面に出したかった。だんだん話しているうちに、下中の考えている全集の内容が、私の考えているのよりはるかにはみ出していることがわかった。彼はさかのぼって、木下尚江、白柳秀湖、石川啄木まで入れるのだという」（「過去と記憶」と書いている。実際には啄木は入らなかったが、日本にかぎらず英、米、独、仏、露などの社会主義的文学も幅広く網羅したものだった）。

『社会思想全集』は島中雄三が主宰する文化学会の岡悌治、木田開（のちに中央公論社営業部長）らの編集になる。文化学会は大正八年に発足したりベラルな学者・思想家の団体で早稲田や慶応の少壮学徒が参加していた。春秋社の円本『世界大思想全集』の向こうをはった今日的な社会思想大系をつくりたいと下中が年来の友人島中雄三と相談して実現した。全四〇巻のほとんどが新訳で、マルクスが三巻、クロポトキン三巻、レーニン二巻とかなりな部分をしめるがローザ・ルクセンブルグ、トロツキーまでを収め、そのねらいは尾崎がいうように社会変革の思想にほかならなかった。なお、この『社会思想全集』の装丁を手がけたのは竹中英太郎で、山口昌男は『挫折』の昭和史（一九九五年、岩波書店）で竹中と下中弥三郎、アナキストグループ、満州とを結ぶ意外な点と線を興味深く描いている。

昭和三年に出した雑誌「平凡」は売れ行き不振で失敗、わずか五号で廃刊した。「平凡」撤退後も先に記した円本全集を次々と刊行し、昭和五・六年には『久米正雄全集』全一三巻、『書道全集』二七巻、『江戸川乱歩全集』全一三巻などの全集物を二五点も刊行し、成功したものもあったが、「平凡」にかけた巨額の宣伝費はあまりに重く、ついに昭和六年一月末、百万円の不渡りを出して経営破綻におちいる。下中の出版に賭ける情熱と経営の素人つばさの両面がいつぱんに露になった結果だといえるかもしれない。しかし、下中はただちに債権者会議を開いて堂々と再建案を示して協力をとりつけ、その数ヶ月後にひそかに準備を進めていた『大百科事典』全二四巻を発表する。『大百科事典』の規模は一冊七〇四ページ、別刷り六四ページ、四六倍判、総項目数約一八万、総原稿枚数九万四〇〇〇枚。これを本年（昭和六年）一月から毎月刊行するというものだった。発表時には無謀な計画だ、神わざだなどの声が聞こえたが、単式印刷という画期的な技術革新（下中が援助し実験済みだった）の援護をうけ、昼

夜兼行の編集努力で実現した。この『大百科事典』の成功によって、平凡社は第二期の出発をするのである。

昭和三年前後、岩波書店は出版社として内的な整備をおこない、文庫や講座を軸にアカデミズムとの連携をさらに強めていったのと並行して、平凡社も試行錯誤的ではあったが全集物を続々と刊行し、百科事典の準備を進めていった。そのために編集体制を強化し（他社からの人材引き抜きなど）、組織づくりをおこなっていく。それは企業経営の近代化という面（岩波の複式簿記の採用など）もちろんあったが、岩波茂雄、下中弥三郎の個人的側面からみると、必ずしも経営管理の強化を目指したとはいえず、湧き起るような出版企画を実現するために必要な手を確保しようと組織化を図ったのではないかと思う。昭和三年におこった岩波の労働争議やその翌年に起きた平凡社の争議に狼狽している二人の姿がそれを物語っている。

また、それまで社外での教育運動や労働運動に明け暮れていた下中が、突然目覚めたように出版活動をはじめたのは、円本の成功に「大衆の手に文化を」という彼のスローガンの実現可能性を見たからではなかったか。彼の動物的な勘がはたらいたのだと思う。この時期、教育への情熱を勘と賭けで出版に結びつけた下中は「百科事典」を志向し、西洋的知性と論理の商品化を直観し、堅実に実行した岩波は「講座」を志向したのである。

## 学問産業の成立

この昭和三年前後という時期は、他の出版社にとっても意味ある時期であった。

中央公論社（明治一九年の「反省会雑誌」創刊に始まる）は、大正一五年に株式会社化をはたし、昭和三年に経営権が嶋中雄作（一八八七―一九四九）に移譲される。翌年嶋中はそれまで雑誌一本で進んできた社に出版部を創設、

『西部戦線異常なし』を翻訳刊行してベストセラーとなり、その後の中央公論社の方向を決定づけた。嶋中雄作はこう書いている。

特に一言付加へなければならぬことは、昭和四年十月、中央公論婦人公論の発行以外、新たに出版部を増設したことである。

麻田氏（中央公論社前社長麻田駒之助）は氏の「雑誌単業主義」を飽くまで操持して絶対に手を出さなかった。是れ固より賢明なる経営法である。然しながら漸次に発達してきた出版資本主義の波浪は必ずしもそれを許さなくなった。雑誌編集法とても瀧田樗蔭時代のような独裁主義、英雄時代では行けなくなった。即ちスター・システムから総合編集への時代的転換がその間に行はれてきたのである。したがって多数の編集者を必要とした。この編集的革命は当然雑誌以外単行本の出版兼業を便宜とする。組織の中に在っては両者は一にして二ではないからである。（『回顧五十年』一九三五年 中央公論社）

この時期における出版社の体質の変化をよく物語っている。「英雄主義」という表現は岩波茂雄や下中弥三郎にもあてはまるだろう。また、文藝春秋社（大正一四年、菊池寛創業）も昭和三年に株式会社になり、明治三〇年創業の長い歴史をもつ実業之日本社も昭和四年に株式会社化をしている。明治時代の出版界をつねにリードした代表的な出版社博文館の総合雑誌「太陽」（明治二八年創刊、高山樗牛主幹）が昭和三年に廃刊となったのも象徴的な事件である。それに対して講談社の「キング」（大正一四年創刊）が、昭和三年には一三〇万部という記録的な部数を達成した。この時期が新旧交代の時代であったことを如実に示すといえるだろう。

もう一つの例を検討しよう。円本ブームは一方で激しい出版社間の競争状況を生み出した。出版社は理念だけで

なく会社を支える条件（市場）を求めはじめた。時代の思想を読み、気分をとらえ、書き手を探した。円本競争は文芸書を中心に展開したと考えられがちだが、『社会思想全集』のような社会科学の分野でもおこった。

昭和三年、日本評論社（大正八年創業）は『現代法学全集』全二五巻を出し、つづいて姉妹編として『現代経済学全集』全三一巻を刊行、どちらも一冊一円である。同年、改造社からは『経済学全集』全四七巻（円本）が刊行され、二つの経済学全集をめぐって両社ははげしい宣伝販売合戦をくりひろげた。

『現代法学全集』は末弘厳太郎責任編集で、執筆者は穂積重遠、上杉慎吉、小野清一郎、我妻栄、田中耕太郎、美濃部達吉ら東京帝大法学部を中心に京都帝大その他に及ぶ。末弘厳太郎は予約募集にあたり自ら「発刊の趣旨」を書き、「『現代法学全集』は法科大学の開放である、その拡張である。それは法科大学の講座を民衆聴衆の前に開放せんとする企てである」と述べている。予約募集は一〇万部を越えたという。当時日本評論社の編集主任をつとめた美作太郎は、全集の「成功によって、日本評論社は、出版界という「中原」の鹿を追う資格を獲得した」と回想し、つづく二社の経済学全集の競合についてつぎのように述べる。

前者（改造社版）には、河上肇、櫛田民蔵、猪俣津南雄、宇野弘蔵をはじめ、大内兵衛、大森義太郎、有沢広巳らの労農派の学者たちが多数参加し、執筆陣の中心を形づくっていた。後者（日本評論社版）には土方成美、本位田祥男、河合栄治郎らの東大経済学部の教授たちに加えて、汐見三郎、高垣寅治郎などの他の講壇経済学者たちが名を連ねていた。（美作太郎「自伝」編集者として）

昭和三年、円本ブームのさなかにこのような出版状況が現れていた。法学、経済学といった学術書が数万単位の部数で売れ、二つの学派が各々出版社と組んで競い合う。近代の学問がようやくこの時期に産業として成立するの



ではないかと思われるのである。岩波書店がその方向を指して進んできたことはすでに見てきた。「世界思潮」に始まる岩波講座（昭和三年）はその具体化である。書籍出版界の求めと学界の要請が一致し、「進歩する学問」という幻想（安倍能成は岩波講座について「最新の学説に遅れざらんことを期し」と書いていた）を双方が補完しあい強調しながら、戦後に受け継がれてさらに拡大し「講座」が一つの出版形式として定着するのである。

もう一つ、先に見たように昭和初期にはマルクス主義をはじめとする左翼思想を基調とした文学や社会科学関係の雑誌、単行本がさかんに刊行された。一方で国家権力は昭和三年の三・一五事件の共産党員全国一斉検挙や特高の設置によって政治活動を徹底的に弾圧した。労働運動や政治運動の高まりと圧迫による退潮という状況のなかで、出版・学界を構成する知識人たちは「思想」を「学問」として出版することによって運動の延命をはかろうとしたのではないだろうか。日本で最初のマルクス『資本論』の完訳は、大正一四―一五年の新潮社から出た全四巻本（高畠素之訳）だが、昭和三年の改造社版『マルクス・エンゲルス全集』全一七巻（後に三一巻）、同社版『資本論』全五巻、それに対抗して岩波ほか五社連盟<sup>＊</sup>が企画した河上肇編訳の『マルクス・エンゲルス全集』（予約募集もしたが翻訳が進行せず中止）、平凡社の『社会思想全集』、春秋社『世界大思想全集』全五四巻等の集中的な出版はこのことを物語っているのではないか。

岩波茂雄と下中弥三郎の二人に焦点を当て、彼らのモチーフと行動によって出版社の基礎が固められ個性なるものが形成される過程を追い、やがて経営的な整備と編集組織の確立を迫られる時期を迎えることを検討してきた。それはおよそ昭和三年前後であり、両社に限らず他のいくつかの出版社にも当てはまることがわかった。創業者の

個性で出版業が営まれていた時代から、会社自体が内的転換をはかり企業化が進む時期であった。出版の企業化、産業化がどのようなおこなわれていったのか、他にも検討すべき要素はあるが、ここでは時代と直接的に切り結ぶ「編集」の質的側面にとらえようとした。岩波書店の場合は「講座」「文庫」として展開し、平凡社の場合は「百科事典」として展開していった。どちらも「教養」主義であることは変わりないが、その質が異なっていたと思う。その違いは岩波と下中の二人の個性によるものであった。岩波茂雄は昭和二年に六五歳で、下中弥三郎は昭和三年に八二歳で没したが、その後の両社にもその個性は引き継がれていくのである。

## 注

\*1 朝日新聞の連載小説を漱石の弟子の一人だった安倍能成の紹介で刊行。安倍は「『こころ』は漱石の自費出版ながら、岩波の処女出版のようにいひ、他からもさういはれて居る」「『こころ』の出版は、岩波が漱石のものを出したと願ったとき、外からもうるさく頼んで来るので、漱石も一つ自費で出してみようかといふ氣になったのだが、なにしろ駆け出しの書店が当時第一の流行作家のものを出したといふ、世間への信用の獲得、その後『硝子戸の中』『道草』を引き続いて出版して、漱石全集の出版元になる素因を作った」と書いている。（安倍能成『岩波茂雄伝』一三八頁）

\*2 当初（大正三年、四月）成溪社から出版された。しかし成溪社は他の出版でつまづいて破産、社長の秋永東洋が下中に紙型を買わないかと持ち掛け、それを買って出版をはじめた。（『平凡社六十年史』五二頁）

\*3 大正十一年、相賀祥宏は月刊雑誌『小学 五年生』『小学 六年生』を創刊し小学館を設立。全学年の学習雑誌が揃うのは大正一三年である。相賀は創刊当初編集校正の一切をひとりでもとめていたという。（鈴木省三『わが出版回顧録』一九八六年、柏書房）

\*4 鈴木敏夫『出版 好不況下興亡の一世紀』一九七〇年、出版ニュース社。清水文吉『本は流れる』一九九一年、日本エ

ディタースクール出版部）等を参照。

\*5 芥川の遺書に、その全集は漱石と同じ出版社すなわち岩波に託すとあり、遺志にそって刊行された。漱石全集の威力である。このとき、芥川がかつて出版を予約したという新潮社との紛争が起こった。（安倍『岩波茂雄伝』一七二頁ほか）

\*6 岩波講座『日本歴史』の編集方針、構成、形式の基本的性格については、拙稿「戦後出版史の一視角——岩波講座『日本歴史』の検証」（『出版研究』三七、一九九七年、出版ニュース社）を参照されたい。

\*7 希望閣、同人社、弘文堂、叢文閣、岩波書店が組織した連盟。改造社の「マルクス・エンゲルス全集」に対抗して同盟の全集を協力計画した。企画中止に際しては岩波書店がそれまでの費用を負担し、予約金を返還した。

#### 参考文献

安倍能成『岩波茂雄伝』一九五七年、岩波書店

『岩波書店八十年史』一九九六年、岩波書店

『写真でみる岩波書店80年』一九九三年、岩波書店

小林勇「惜櫟莊主人」（『小林勇文集』第三卷一九八三年）筑摩書房

村上一郎『岩波茂雄』一九八二年、砂子屋書房

塙作楽『岩波物語——私の戦後史』一九九〇年、審美社

毎日新聞社編『岩波書店と文藝春秋』一九九六年、毎日新聞社

尾崎秀樹「下中弥三郎と平凡社の歩み」（『平凡社六十年史』一九七四年、平凡社）

下中弥三郎「思い出を語る」（『出版人の遺文 平凡社 下中弥三郎』一九六八年、栗田書店）

下中弥三郎『万人労働の教育』一九七四年、平凡社

同『万人労働の哲学』一九七四年、平凡社

『下中弥三郎事典』一九七一年、平凡社

『中央公論社の八十年』一九六五年、中央公論社

嶋中雄作『回顧五十年』一九三五年、中央公論社

林達夫ほか編『第一書房 長谷川巳之吉』一九八四年、日本エディタースクール出版部

岩波茂雄と下中弥三郎

山口昌男 『「挫折」の昭和史』 一九九六年、岩波書店

鈴木省三 『わが出版回顧録』 一九八六年、柏書房

水島治男 『改造社の時代』 戦前編・戦中編 一九七六年、図書出版社

小川菊松 『出版興亡五十年』 一九五三年、誠文堂新光社

百目鬼恭三郎 『新潮社九十年小史』 一九八六年、新潮社

矢作勝美編著 『有斐閣百年史』 一九八〇年、有斐閣

津村喬 「結局、今、本の世界はどうなっているのか」 （『変貌する読書空間』 一九八二年、学陽書房）

出版太郎 『朱筆 出版月誌1968～1978』 一九七九年、みすず書房

田所太郎 『戦後出版の系譜』 一九七六年、日本エディタースクール出版部